〈追悼文〉

野村先生を偲ぶ

日本医科大学医療心理学教室
吉川栄省

「推敲に推敲を重ねないと。」先生によく言われた言葉だった。私は精神科医として野村先生の後輩であり、今はなくなってしまった日本医大第一病院で過ごした最後の世代でもある。そのような中で、何度か先生のご指導を受けた。また、矯正の仕事などを引き継いだこともあった。共著で本を執筆させていただいたこともある。どこか不完全だなと思いながらも煮詰まってしまい、先生に原稿や文章を見てもらうと、必ずといっていいほど言われた言葉である。

世の中は今、ペーパーレス時代であり、実際に文字を書く機会がどんどん減っている。手紙からメール、ＳＮＳと変化していき、音声入力まで使える。そんな中で、一つの文章、一つの言葉とじっくり向き合う機会が減っているのは間違いない。頭の中に思いついた言葉をとにかく、デバイスの中に打ち込んでいく、あまり振り返ることもなく、スピードを重視して、そのまま発信することも少なくない。メールは一日返事がないと遅いと感じ、仕事はどこまでも追いかけてくる。不完全な文章を、平気で出せるようになった自分に時々気が付く。ひどい誤りを後で見つけて恥ずかしく思うことも少なくない。

嘗ては、じっくりと考え、ゆっくりと頭の中に沸き上がっていく言葉を紡ぎながら文章を考えることは喜びであった。

先生の書かれた、「刑務所の精神科医」を読み返してみる。何度も、推敲され練り上げられた文章であることは、明らかである。そして思う、自分にはここまで練り込まれた文章が書けるだろうかと。病の中で、体の不調や、倦怠感、不安のなかで、あれだけの言葉を連ねるエネルギーはどこから来たのだろうか？言葉に対する姿勢が、違うのだなと思った。先生は無宗教であり、何も信じないと言っていた。だからこそ、人生を振り返り死と向き合う中で、一言、一言、

言葉を選び積み上げていった文章は何度読んでみても胸に迫るものがある。

本当に有り難きことである。

私は先生の倫理の講義を引き継いでいる。最初先生のスライドを参考にさせていただいたが、スライドを見てもどのような講義をしているか今ひとつわからない。講義動画を見て、始めてわかる。先生は、学生の様子を見ながら、その場その場で、それらを補っていた。実際、その場になって初めて出てくる言葉、雑談ということにもなるかもしれないが、その雑談こそ、座学における醍醐味でもある。一方通行のように見える形の中にも、きちんとした双方向のコミュニケーションがある。それがないなら、家で本を読んでいればそれで済む。

私の学生時代を振り返っても、講義の内容よりも、壇上の先生から発せられた言葉の中の幾つかが、今も心の中残っている。実際の経験に基づいた生きた言葉、決して、教科書や、論文には書かれていない言葉。知識のあるものが、ないものに対して与える無機質な言葉ではなく、医療に向き合った先輩の生きた言葉として　心の中に留まっている。

医学生に倫理の講義をする時、とても大切なことであろう。

倫理を専門としない私がそれを行うことの戸惑いに対して、背中を押してくれたのも先生であった。

それでも、私には今そのような講義をしているとはいえない。話すことを決めておかなければ、どことなく落ち着かない。でも、教えなければならない事柄と事柄の間に、ふと出てくる言葉こそ、大切な言葉なのだと思う。野村先生の講義のスタイルを見て、座学の講義の奥深さが改めて思われる。

私は今、野村先生が診ておられていた方を診察する機会を与えられている。患者様にどのように向き合われていたのか？野村先生の外来を受診してしばらく来なかった患者様が、何かにつまずき、先生に話を聞いてもらおうとやってくる。先生が亡くなられたことを知り、言葉が止まる。沈黙のなかで、野村先生、

患者様、私の間にひとつの繋がりが生まれる。それだけで、何かが変わっていくような気がしたことは一度ではない。

精神科の外来には多くの辛さを抱えてやってくる。気が付くと流れ作業のように淡々と時間だけが過ぎていく。今日はきちんと向き合えただろうか？自分の中で足りない言葉や、余計な言葉で相手を傷つけることはなかっただろうか？　私の口から発された言葉は自分の心にあるものと一致していただろうか？

臨床の中のふとした会話は後から修正されることは容易ではない。会話の中に飛び出した言葉は消しゴムでも、修正液でも消すことはできない。そして、目の前にいる人は言葉を待ってはくれない。

そんなことを振り返る時、やはり「推敲に推敲を重ねないと」という言葉が思い出される。言葉にきちんと向き合っていくことが、咄嗟に出てくる言葉に反映される。それは、言葉に表れていないことを慮ることにつながる。先生の御著書の中でも触れられている。目の前にいる人の語られない言葉の向こう側に、語ることのできない苦悩が隠されているかもしれない。そんな思いを馳せることができるか、できないかが、治療的な関係性が作られるかどうかに繋がっていくのだと思う。このことは私が先生から学んだ大切な事柄のうちのひとつだ。

先生は学生に対して、一見とっつきにくく、気難しいようでいて、とても優しかった。おそらく、ご自身の大学時代の経験がそうさせていたのかもしれない。医師という職業はどこか、専門的で狭い世界の中にこもっているところも少なくはないが、反面、多様な人材が必要でもあり、一旦その世界に入れば受け入れられる懐の深さがある。それは、日本医大の校風なのかもしれないが。。。一旦大学で人文社会学をおさめた後、医師になったという先生の経歴もまた、学生に対する寛容さに繋がっていたのかもしれない。目に見える行動だけが全てではないとして接することの大切さを知るが故の寛容さであったのかもしれない。学生は教員である自分がどんなに心を開こうとしても、全てを語ってくれるわけではない。友人のこと、家のこと、語りたくないこと、語れないことが全くないなどということはあるはずもない。

私は、学生に対して真摯に向きあっているのか、表れている表面の行動、言動だけに気を取られてはいないか？語られていない過去、現在そして、将来、

彼等が対していくであろう多くの病を抱える人、それらを心の片隅に置きながら、話を聞き、言葉を選んでいかねばならない。決して容易なことではないけれども。。。

それもまた、学生相談について、先生に相談させていただいた中から学んだことの一つである。

原稿を書いているとき
診療をしているとき
学生と話をしているとき

先生の言葉を思い出す。
先生との交流の中で、記憶に残る言葉を思い返しながら
その意味を改めて考える。

未だ心の中で先生と時々会話している自分に気付かされる
もしかしたら、生きておられた時よりも、たくさんの話をしているのかもしれない。

なんだかまとまらない文章になってしまった
先生にこの文章を見せたらまた、「推敲に推敲を重ねないと。」と言われてしまいそうである。